(記録)　NPO 経営塾 2018　第２夜

8月6日(月)　2. 他セクターの人材確保や働き方を学ぶ。

(1) 民間で進む多様な働き方を学ぶ。【株式会社ダンクソフト　片岡幸人氏】

1. 経歴
2. 現状について。
   家族、複業、勤務場所、仕事以外の活動(IT コミュニティ運営・NPO 活動)
3. 生活と働き方
4. ICT を活用した働き方
5. 人材確保の話
6. 皆さんへの質問

講座の概要

企業就職→転職→役場へ U ターン→スキルを磨きたい→大学院→ベンチャー共同経営→家族の命を守る期間→複業への道筋→もっと自分のやりたいことに取り組みたい→3 か所での複業　→　どんな職場でもできないことはない。(佐川町役場で週一の仕事)　複業はやりたいことを持っていても、それだけでは収入にならないというときに、仕事になるスキルを活かし、別の仕事で収入を得るということ。やりたいことがない人には向いていないと思う。

このような働き方に ICT の活用は必須。テレビ会議、SNS などの活用、ペーパーレス、ファイル共有など。経費の削減にもつながる。無料で使えるものも多い。最初苦労しても甲斐がある。

雇用とは、チームメンバーの人生を預かること。人件費がない場合は、やりがいや間接メリット、複業なども考えると良いのでは。これからは 100 年以上生きる時代。スタッフの収入増の計画にうしろめたさを感じないでほしい。

皆さんへの質問：生活設計や人生設計、事業設計を立てていますか？　NPO ってなんですか？　NPO とボランティアは同じですか？NPO の役員報酬と給与の違いはご存じですか？NPO の経営者と企業経営者の違いは？

皆さんのやられていることは、責任を持たなくてできる仕事ではない。ボランティアではできない。プロとしてのサービスを提供しているのだから、相応の対価を要求すべきであり、行政もプロとしての対価を認めてほしい。

先が読めなくても設計していかなくてはいけない。そうでなければ検証できない。

人生には家族の命を守らなければいけない時がある。そのときに守ることができるか。

（2）慢性的な人手不足に悩む福祉施設の人材確保と定着について学ぶ。【高知県社協　仙頭正輝】

1. 高知県の今後の介護人材の需給推計
2. 高知県福祉人材センターの取組
3. ターゲット設定やプログラム
4. 求める人材を明確にすることの重要性（採用要件、育成要件）
5. 応募者に団体の魅力を伝えることの重要性
6. 自法人・施設の人材要件の設定
7. 非営利組織の人材確保に向けたアイデア

講座の概要

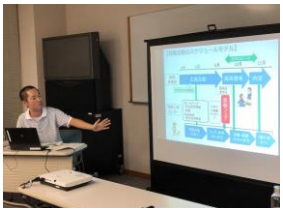
介護人材は、2025 年に 1064 人不足するという推計を高知県は出している。今後担い手を確保しなければならない。高知県福祉人材センターでは、福祉職場見学・体験事業や、ふくし就職フェアや、職場見学ツァーその他の人材確保事業を行っている。

人材の属性ごとに戦略を変え、開拓や周知を行っている。ふくし就職フェアは全ターゲットに向けたもの。福祉職場のプレゼンテーションや、ふくしの仕事ミニセミナー、ブースでの就職相談会などを行っている。学生の就職活動のモデル的スケジュールに合わせ開催日を決めている。

求める人材を明確にすることが重要。事前に持っておいてもらいたい採用要件（ヘルパーの資格などの必要なスキルや、人と関わる勇気など後天的にはなかなか育たないと思われる姿勢や態度など）と、育成要件（採用後に育てる資質）を明解にする。優先順位をつける。求める職員像をつかむ。

その後、そのような人材をどう集めればいいか、どうすれば魅力が伝わるか、そのような人々は何をやりがいと感じ、何を安心と感じるか。それらを考え募集をかける。どう選考し評価するかも考える。裾野を広げなければ山は高くならない。これが今福祉業界が考えている人材確保の方法。

・人材は存在する！→高知大協働学部、高知県立大学など。
・NPO に魅力はたくさんある！
→事業に共感性がある。
・エピソードを伝える機会を作ろう！→「NPO 合同就職相談会」。



講座終了後の声：地域協働学部の学生たちから、NPO に関わりたいという相談をよく受けるが、どんな NPO があるのか、またどの NPO が本気かということを知りたい。本気のところと関わりたい。合同相談会などをやってもらうとありがたい。

講座終了後の声：大卒者が勤めてくれない。NPO に対する負のイメージを払拭する活動も必要では。 →「その団体のやりがいと安心を、エピソードを元に事実を伝える。」

講座終了後の声：人材確保に苦労している。とても重症者の職場と思われ敬遠されているのではないか。 →裾野を広げファンを増やす、事務所訪問などを実施してはどうか。

第2夜オーガナイザーコメント：NPO はどうしても活動に焦点があたっているが、だんだん、そこで働いている者の働き方生き方を見せていかなければならないというステップに来ているのではないか。声はあげていくべきであり、このテーマに取り組んでいくことは非常に重要だ。